

大人用



# 伝道地便り

2020年 第4期 南アジア支部

- |                     |     |
|---------------------|-----|
| 第1話「本当の神様を探して」      | インド |
| 第2話「忘れられない2つの夢」     | インド |
| 第3話「3回の攻撃」          | インド |
| 第4話「家の中にライオンが！」     | インド |
| 第5話「外国でキリストに出会う」    | インド |
| 第6話「変わってしまったおじいちゃん」 | インド |

ADVENTIST  
MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団 伝道局 安息日学校部



## 伝道地便りの用い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

- 1) 前もって何度か目を通し、自信を持って読む。
- 2) 棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。
- 3) 伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。
- 4) 誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。
- 5) できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。
- 6) 時には、スキット(寸劇)風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」紹介しましょう。

# 1. 本当の神様を探して

インド



ジャヤシーラ・ヴェンカテッシュ 34歳

9年前、ジャヤシーラはインド中南部の田舎町でとても貧しい暮らしをしていました。

彼女の夫のヴェンカテッシュは、レンガ職人の仕事を必死で探していました。ジャヤシーラは家で4歳の息子と2歳の娘の世話をしていました。そして毎日、家の神棚にある3枚の偶像の写真を拝んでいました。

彼女は目を閉じて、こう唱えました。「今日の食べ物を与えたまえ。私たちにはお金が全然ないので、せめて今日1日過ごせるだけの食べ物を与えたまえ」

毎週金曜日に、ジャヤシーラ夫婦は断食をして夜明けから日暮れまで偶像に祈りました。

神々に熱心に祈っても食べ物はほとんどありません。近所の人から少し野菜を持ってきてくれることもありましたが、もらえないときはみんなでおなかを空かしていました。ジャヤシーラは、神々がなぜ自分たちを助けて下さらないのだろうと思っていました。そして祈りに答えてくれそうな他

の神を探し始めました。

ある日、日曜礼拝をしているキリスト教会を見つけました。そして夫と子どもたちと一緒に礼拝に出席しました。本当の神様を見つけたかったのです。

突然、彼女は危機に陥りました。女の子を出産したのですがその赤ちゃんは呼吸が困難な状態でした。医者も何もできず、「この子の病は私の手に負えない」と言いました。

ジャヤシーラは教会の牧師に、祈ってくださいとお願いしました。牧師はイエス様に祈り、赤ちゃんは回復しました。ジャヤシーラは、自分は本当の神様を見つけたのかもしれないと思いました。それからは、子どもたちの誰かが病気になると、牧師に祈ってもらいました。子どもたちはいつもそれで治ったので、病院には一度も行かずに済みました。

しかし、その後その牧師が亡くなってしまいました。ジャヤシーラはひどく動揺しました。牧師の祈りに頼り切っていたからです。

ある日、子どもが3人もとも病気になりました。ジャヤシーラはどうしたらよいかわかりませんでした。誰のところに行けばよいのでしょうか。いつも行っていた彼女の教会は牧師が一時的に不在でした。2人の男性が、どちらが責任者になるかで争っていたからです。彼女はどうやってイエス様に祈ったらよいのかわかりませんでした。怖くなりました。彼女は泣きながら聖書を手に取って、読もうとしました。4年生までしか学校に通っていませんでしたが、何が書いてあるのかはどうか理解することができました。そこで、イエス様についての情報を必死に探しました。読んでいくうち、イエス様が日曜日ではなく第7日目の安息日に礼拝をしていたことを知り驚きました。彼女は本当の神様を求めて、自分の教会の新しく選ば

れた牧師に尋ねました。

「聖書には、土曜日が聖なる日と書いてあります。どうして私たちは日曜日に礼拝しているのですか？」と彼女は聞きました。牧師はその質問が気に入りませんでした。彼女のような、学のない人の質問は、なおさらです。

「あなたは悪魔にとりつかれている」彼は吐き捨てるように言いました。「イエスがすべての律法を無効にした。もう気にしなくて良いのだ」

ジャヤシーラはその答えに納得しました。けれどもその後、12歳の女の子が教会の祈禱会のときに十戒を暗唱するのを聞きました。その子は第4条の「安息日を心に留め、これを聖別せよ」(出エジプト記20章8節)も含んで暗唱していました。

牧師は、十戒を全部覚えたことでその女の子を誉めました。ジャヤシーラは不思議に思いました。もしイエス様が律法を無効にしたのなら、先生はどうして十戒を覚えることを大切にするのだろうか。

その後少し経って、ジャヤシーラが牧師の家を訪ねると、十戒を書いた紙が壁に貼ってありました。彼女は本当に混乱してしまいました。もう無効になったというのなら、なぜ牧師はそれを壁に貼っているのでしょうか。彼女は生まれて初めてイエス様に祈りました。「イエス様、どうか私に真実を教えてください」

その夜彼女は夢を見ました。夢の中で走っていると、誰かが不意に彼女を止めました。目を覚ましてからも、途中で止められたことで嫌な気持ちが残っていました。眠れないまま、彼女は祈りました。「イエス様、走っていたのに、今はもうどこに向かったらよいのかわかりません。どこに行けばよいのか教えてください」

何日かして、7年も会っていない親せきから連絡がありました。そして、安息日を含む十戒すべてを守っている教会に行っていると言いました。

現在、ジャヤシーラと夫は忠実なセブンスデー・アドベンチストです。そして新しい家に、家の教会を始めました。家族はもう貧しくはありません。最近の安息日に、15人の村人が彼女の家の教会でイエス様に心を捧げました。

ジャヤシーラは神様がお祈りに答えて道を示し

てくださったと信じています。

今期の13回献金の一部は、大都市カルナータカ州ベンガルールに教会を2つ建てるために使われます。皆様の惜しみない献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

- Facebook ([bit.ly/fb-2mq](https://bit.ly/fb-2mq)) で写真をダウンロードしてください。

### 宣教メモ

- 言い伝えによると、使徒トマスがインド人に福音を伝えて南部にネストリウス派のキリスト教会を設立しました。インド人のクリスチャンは4世紀からいたという歴史的根拠があります。
- セブンスデー・アドベンチストの教えがいつインドに伝えられたか、いつ伝道が始まったのかは、はっきりとわかっていません。1890年にS.N.ハスケルとP.T.メーガンが世界一周の伝道旅行の際にコルカタからボンベイまで横断したことはわかっています。

## 2. 忘れられない2つの夢

インド



ラシミ・ラヴィ・チャンドラ 32歳

私は6人姉妹の長女として生まれました。家はクリスチャンではありませんでしたが、私はクリスチャンの生活に憧れました。セブンスデー・アドベンチストのラヴィという男性と恋に落ちた私は、心をイエス様に捧げ、彼と結婚しました。

結婚してからの3か月は幸せでしたが、それから私は、昼間突然失神して意識を失うようになりました。両親は、私が今までの宗教に背を向けてクリスチャンになったので悪魔がとりついたのだと思いました。それでも父は、アドベンチトの牧師のところまで祈ってもらうようにとアドバイスしてくれました。

ラヴィと私は牧師先生の家に行きました。彼は私の頭に手を置いて、

「主よ、彼女がクリスチャンとしての生活を続けていくことが御心でしたら、どうぞ彼女をあなたの御用のため力強く働けるようにしてください。そしてサタンの力をすべて取り去って下さい」と祈りました。

夫はその夜ぐっすり眠っていましたが、私は悪い夢を見ました。黒いガウンを着た男たちが私を

取り囲んでいるのです。その中の際立って背の高い男が、私を怒鳴りつけてきました。別の男が私の手をつかみ、怒っている背の高い男を指さしました。

「なぜアドベンチストの教会に行ったのだ。あの背の高い男があなたの神だ。お前は彼を拝まなければならない。イエスのところに行つてはならない」

背の高い男はかんかに怒っていたので、私は怖くてそちらを見ることもできませんでした。そして下を向いて泣きました。

間もなく、白いガウンを着た人が後ろからやってきて、私の肩にやさしく手を置きました。その人の服は見えましたが顔は見えませんでした。

「怖がらないで。私がそばにいるから」その人は優しく、明るい声で言いました。そして黒い服の背の高い男を指さして、「もう顔を見ても大丈夫だよ」と言いました。

肩に置かれた手に力を得て、私は怒っている男の顔をまっすぐ見ることができました。その顔は冷酷で、私への怒りにゆがんでいました。

翌朝、ラヴィと私はその夢の話をするために牧師先生の家に行きました。

「あなたの肩に手を置いたのは主イエス様ですよ」と牧師先生は言いました。そして私たちは一緒に祈りました。その日を境に、気絶することはなくなりました。

私の人生は一変しました、と言えたら良いのですが、そうではありませんでした。時間がかかりました。結婚前、私はとても頑固でした。イエス様に心を捧げはしましたが、頭の中にはそれまでの習慣が残っていて、実家での宗教行事に参加していましたし、安息日を重んじていませんでした。けれども例の夢のあと、夫と牧師先生が私のために祈ってくれるようになりました。私は徐々にいろいろなものを手放し、安息日に世の中の仕事に

携わることも止めました。

そのころまた夢を見ました。優しい言葉がこう言うのです。「罪を犯してはいけません。裁きのときが迫っています」その声はとても気持ちのよいものだったので、驚くような言葉だったのに怖くは感じませんでした。

目を覚ますと真夜中でした。夫に夢の話をする  
と、彼は、

「それは聖霊だよ。サタンは絶対に裁きの話はしないから。気を付けるんだよ」と言いました。

その夢の後、私は祈りながら自分の生活を見直しました。神様の助けにより、頑固さが薄れていきました。それから私は、誘惑に打ち勝つために助けを求めて前よりもずっと祈るようになりました。夫と私は前よりも多く一緒に祈るようになりました。そして教会の伝道にも参加するようになりました。

今私たちには 10 歳と 6 歳の息子がいて、2 人とも教会で歌ったり演奏したりしています。私は公務員として、土曜日の代わりに日曜日に働いています。私には、クリスチャンではない人たちに証をしたいという希望があります。教会に行ってみたいと言っている同僚が 2 人与えられ、喜んでいます。

神様が私に与えてくださった 2 つの夢に感謝しています。その夢を通して、イエス様がいつも私たちと一緒にいてくださることが理解できましたし、神様にすべてをお捧げすることを固く決心しました。

今期の 13 回献金の一部は、ラシミたちが住むベンガルールに教会を 2 つ建てるために使われます。皆様の惜しみない献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

- これはインドのラシミという女性が話している 1 人称のお話なので、女性に読んでみましょう。
- YouTube でラシミを見ることができます。  
[bit.ly/Rashmi-Chandra](https://bit.ly/Rashmi-Chandra)
- Facebook ([bit.ly/fb-mq](https://bit.ly/fb-mq)) で写真をダウンロードしてください。

### 豆知識

- 1915 年 7 月に、南インド訓練学校がタミル・ナードゥ州のコーヤンブトゥールで開校しました。それから 27 年の間に、学校はまずベンガルールに、それから現在のブネーに移転しました。
- 学校の名前も何度も変わりました。1937 年に、開拓者のウィリアム・スパイサーを記念してスパイサー・カレッジとなり、1943 年にスパイサー宣教師カレッジ、1955 年にスパイサー記念カレッジ、元の学校が開校してから 100 年近く経った 2014 年からは、スパイサー・アドベンチスト大学となりました。

## 3. 3回の攻撃

インド



アルカ・マトウ 36歳

アルカはインドのアムリトサルという町に住んでいます。ある日彼女は、14人の家族と一緒にサムソン牧師と黙示録の研究をしていました。

牧師先生は聖書を持って部屋の隅に立ち、アルカの家族はベッドや床に座って話を聞いていました。

牧師先生は黙示録12章9節を読みました。「この巨大な竜、年を経た蛇、悪魔とかサタンとか呼ばれるもの、全人類を惑わす者は、投げ落とされた。地上に投げ落とされたのである。その使いたちも、もろともに投げ落とされた」

これを聞くとアルカの義理の父シャシパルは、ぱっと立ち上って牧師先生に詰め寄りました。

「なぜイエスについて話すんだ。この地上で力を持っているのは私だ！」シャシパルは怒った目をして牧師先生をどなりつけました。

サムソン牧師は、悪魔が自分を恐れさせようとしているのだと気づきました。けれどもヨハネ第一の手紙4章4節の「あなたがたの内におられる方は、世にいる者よりも強いからです」というみ言葉を思いだして、家族に「怖がらないでくださ

い。ひざまずいて祈りましょう」と言いました。

シャシパルはひざまずこうとせず、どなり続けました。サムソン牧師はシャシパルの頭に手を置いて目をまっすぐに見つめ、こう言いました。

「悪魔よ。お前はカルバリーの十字架上のイエスの死によって既に敗北している。私はイエス様の流された血によって清められている。お前は私に力をふるうことはできない。共に祈っている私の友人たちにも手は出せない。イエス様はここにおられる。主の霊が私たちの上であり、悪魔を打ち負かす。主イエス・キリスト様のみ名と彼の血による力によってお前に命じる。この人から出ていきなさい！」

シャシパルは膝から崩れ落ちました。そしてゆっくりと、落ち着いた声で「イエス様ありがとうございます」と言いました。

悪魔はいなくなりました。

「アーメン。神を賛美します」と牧師は言い、家族みんなで『神様は素晴らしい (Good Is So Good)』を歌いました。

1週間後、サムソン牧師は聖書研究を再開し、黙示録12章11節を読みました。「兄弟たちは、小羊の血と／自分たちの証しの言葉とで、／彼に打ち勝った。」

その途端、アルカの16歳の息子のジョンが、ライオンのようにうなり始めました。そしてロバのようにいななき、犬のように吠え、蛇のように「シュー」という音をたてました。そして、「牧師にここで祈られるのは嫌だ。僕の家でイエスの名前を言わないで！」と言いました。

サムソン牧師は、先週と同じ悪霊が力を増して戻ってきたことがわかりました。そして、「怖がらないでください。断食して祈りましょう」と言いました。

家族は3日間、日中は食べ物も水も取りませんでした。3日目の金曜日の夕方に、牧師先生は聖



書研究のためにまたアルカの家に戻ってきました。ジョンはにっこりして、家族と祈るためにひざまずきました。吠えたりいなないたりせず、牧師の手を取って自分の頭に置き、「僕のためにお祈りしてください。体が弱っていて、心が重いし、頭も痛いんです」と言いました。

サムソン牧師は彼のために祈り、ジョンは二度と動物のような声は出さなくなりました。けれどもこれで終わりではありませんでした。

次の週、サムソン牧師はエフェソ 6 章 10~18 節を開いて、クリスチャンが悪魔と戦うために身に付ける神の武具の必要性について話していました。するとアルカの夫のサリンダーが、ジョンの方を向いて「お前の中にいた悪魔はどこに行ったんだ？ もうお前の中にはいない。悪魔は俺の中に入った！」と怒鳴りました。

サムソン牧師はひざまずくよう家族に呼びかけました。祈り終わると、家族は詩編 23 篇と 91 篇を読みました。

そして「これはサタンの最後の抵抗です」と言って、家族で『イエス様のおられる家は幸せ (When Jesus is in the family, happy, happy home!)』を歌いました。

夫のサリンダーも歌に加わりました。悪魔は去っていき、二度と戻ってきませんでした。

アルカと家族は、別の世界宗教による以前の生活から、長い道のりをここまでやってきました。今もまだイエスの恵みと義について学んでいるところです。

「私の家族みんなのために、特に、私の母がイエス様を受け入れるようにお祈りしてください」とアルカは話しています。

今期の 13 回献金の一部は、アルカが出席しているアムリトサルが崩れかかった小さな教会を大きなものに建て替えるために使われます。皆様の惜しみない献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

- YouTube でアルカを見ることができます。  
[bit.ly/Alka-Mattu](https://bit.ly/Alka-Mattu)
- Facebook ([bit.ly/fb-mq](https://bit.ly/fb-mq)) で写真をダウンロードしてください。

### 豆知識

- パンジャブはパキスタンと国境を接するインドの州で、シーク教コミュニティの中心地です。
- アムリトサルは、パシュミナ（絹のスカーフ）や木でできたチェス盤やチェスの駒の製造でよく知られています。
- パンジャブは、2 つのペルシャ語からなる言葉で、panj は「5」、ab は「水」を表します。つまり 5 つの川（ピアース川、チェナーブ川、ジェラム川、ラビ川、サトレジ川）があるということです。

## 4. 家の中にライオンが！

インド



サムソン・グーラム・マシー 48歳  
～父親の話～

グーラム・マシーには、神様について疑問に思うことがたくさんありました。

小さいころは父親に連れられて、週に2日、宗教的な集いに出ていました。1日は、家族が代々礼拝していた場所に、日曜日には様々なキリスト教の教会に行きました。

グーラムの父親は誰を礼拝したらよいか決められませんでした。あるとき、家族に伝わる宗教書を読んでいたお父さんが、こう叫びました。「この本には、イエスの方が、私たちの預言者よりも多く出てきている。なぜなんだ！」

グーラムの家族は、自分たちだけの宗教を作り上げました。それは、一部は家族の代々の宗教、一部はキリスト教というものでした。

グーラムは成長するうちに、だんだんとキリスト教の方を好むようになりました。そしてもっと知りたいと思うようになりました。イエス様を自分の目で見たいと思って、「イエス様、私は顔と顔を合わせてあなたにお会いしたいです」と祈りました。

青年になったグーラムは、家から遠く離れたチャクワールという村の外れにある小屋に引っ越しました。何週間も一人で聖書を勉強したいと思ったのです。

村人たちはクリスチャンではなく、とても迷信深い人々でした。彼らはグーラムの静かで優しい態度に気づきました。そして、彼が村の病人のために祈った時に、その人が回復したのを見て、彼に「ホーリーマン（聖人）」というあだ名を付けました。

村人たちは彼を聖人として敬い、毎日朝晩の食べ物を持って小屋を訪ねてきました。

小屋の中では祈り、聖書を読みました。そしてダニエル書と黙示録を研究しました。イエス様に会いたいという祈りも続けていて、「主よ、私はあなたにお会いしたいです。どうかお姿を見せてください」と祈っていました。

ある夜、彼は土の床に座って聖書を読んでいた。ふと、部屋に誰かいるような気がして目を上げると、そこには大きなライオンがいました。ライオンはかがんで、まっすぐに彼の方を見ていました。

グーラムは驚いて後ずさりしました。すると男性の声がはっきりと聞こえてきました。

「恐れてはならない。手を伸ばして、ライオンの頭からしっぽまでをなでなさい」

「そんなことはできません！ 殺されてしまう！」グーラムは叫びました。

「でも、あなたは私に会いたいと言っていないでしたか」その声は言いました。

「イエス様に会いたくて祈っていたのです」グーラムは言いました。

「イエスはユダ族のライオンです」その声は言いました。

「さあ、なでてごらん」

グーラムはイエス様がユダ族の獅子であるという黙示録 5 章 5 節を読んでいました。怯え切っていました。逆らうこともできません。震える手を上げて、ライオンの頭に置きました。ライオンは動きませんでした。ゆっくりと、震えの止まらない手を頭からしっぽへと動かしました。グーラムがライオンから離れると、ライオンはしっぽを振り、土の床からほこりを巻き上げて、夜の闇へと消えていきました。

朝になって、村の女性が朝食を持ってきました。彼女はライオンの足跡を見つけると、驚いて立ち止まり、食べ物を落として、村に駆け戻りました。

そして、「ホーリーマンは死んでしまった！ ライオンに殺されてしまった！ 小屋に足跡があったんだよ！」と叫びました。

村人たちは小屋へと急ぎました。彼らはグーラムが床に座って聖書を読んでいるのを見つけました。ライオンが去ってからも動いていなかったのです。村人たちはこの話を聞いてとても驚き、イエス様のことを教えてほしいと懇願してきました。

その後、グーラムは安息日のことを知り、セブンスデー・アドベンチストになりました。そして自分の故郷のダラムコット・バグガにアドベンチストの教会を建てました。5 人の息子と 2 人の娘に恵まれ、1999 年に 90 歳で亡くなりました。

彼の末の息子のサムソンは現在 48 歳ですが、このライオンの経験を与えられた神様を褒めたたえています。「神様は私たちの心の中の願いをかなえることが大好きなのです」と彼は語っています。

今期の 13 回献金の一部は、サムソンが牧師として働いているアムリトサル教会を建て替えるために使われます。皆様の惜しみない献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

- YouTube でサムソンを見ることができます。  
[bit.ly/Samson-Masih](https://bit.ly/Samson-Masih)
- Facebook ([bit.ly/fb-mq](https://bit.ly/fb-mq)) で写真をダウンロードしてください。

### 豆知識

- 「インド」という国名はインダス川からきています。紀元前 3300 年に、肥沃なインダス川流域に、人々が住みつきました。これが世界最古かつ最大の文明の始まりでした。
- インドには、世界最大の郵便システムがあり、郵便局の数は 15 万以上あります。これは中国の 3 倍の規模です。シュリーナガルのダル湖には水上郵便局もあります。それはハウスボートの上にあります、切手博物館も併設されています。
- インド料理は世界中で人気ですが、地域によってさまざまなバラエティがあります。この多様性は、インド国外のインドレストランには見られません。お客たちは、例えばダル、サモサ、ナン、タンダーリチキンといったよく知られたものを求めるのです。

## 5. 外国でキリストに出会う

インド



ブリジェッシュ・クマール 27歳

23歳のブリジェッシュ・クマールは、今いるインドネシアの首都ジャカルタで仕事を見つけられませんでした。彼は学費のために借りたお金を返すために働こうと、2014年にインドからジャカルタに渡って来ていました。彼の両親が彼のために学費を知り合いから借りていたのですが、その知り合いがお金を返してほしいと言ったからです。

ブリジェッシュは自分にもできる仕事があるはずだと考え、家に泊めてくれていた同じインド人の友人に、職探しを手伝ってほしいと頼みました。

友人にも仕事の当てはありませんでしたが、2000アメリカドルで、アメリカの難民に認定してくれるという人を紹介してくれました。ブリジェッシュには1000ドルしかなく、それも両親に送ろうと思っていたものでした。けれども難民になれたらもっとお金が稼げると思い、その人にお金を渡しました。その人は1週間以内にアメリカ行きの船に乗せてあげると約束してくれました。

半年後に、彼はジャワ島から小さな船に乗り込みました。そこには他に18人のインド人と16人のネパール人がいて、全員が亡命希望者でした。

2人のインドネシア人がその船の責任者でした。それはひどい船旅でした。旅を始めて2日後に食料が底をつきました。さらに2日後、飲み水が無くなりました。ブリジェッシュは雨水を集めて飲みました。7日目、船長が、燃料がほとんど無くなったと言いました。

数時間後、水平線に陸地がわずかに見えてきました。船はミクロネシアのヤップ島のに着岸すると、乗客と乗組員はすぐさま拘留されてしまいました。

ブリジェッシュは他の人たちと一緒に埠頭に半年間留め置かれました。アメリカの警官や連邦捜査官が尋問しに来ました。彼は難民になりたかったのですが、ミクロネシア当局は、彼をインドに送還したいと思っていました。

様々な教派のキリスト教の聖職者たちが、食べ物と生活必需品を持ってやって来ました。彼らはイエス様のことを語りました。ブリジェッシュは今まで一度もイエス様のことを聞いたことがありませんでしたし、興味も引かれませんでした。

何か月も過ぎ、訪ねてくる人もいなくなりました。当局は仮設のテントを作るために防水シートをくれました。食料もほとんど無くなり、ブリジェッシュは希望を失っていました。そこに、牧師のカレメノ・イファが、輸送コンテナと共に現れました。その中に食べ物と服が入っているのを見て、ブリジェッシュと仲間たちは涙を流しました。カレメノ牧師は定期的にやって来て、そのたびに、何人かが彼を取り囲んで話を聞きました。

「他の神父や牧師たちがみんな来なくなってしまったのに、あなたはなぜ今も来てくれるのですか」とそのうちの1人が訊きました。

「イエス様があなたのことを、私が愛しているよりも愛しておられるからです。イエス様はあなたを救おうとしておられます。あなたに自由を与えようとしておられるのです」と牧師は答えまし

た。

彼はセブンスデー・アドベンチストの牧師でした。皆がしつこく尋ねたので、牧師は、皆に食料を持ってくるために自分は食わずに過ごしていることをしぶしぶ認めました。足止めされていた難民たちはそれを聞いて泣きました。その日、9人のネパール人がイエス様に心を捧げました。彼らは教会用に特別にテントを張って、安息日を守り始めました。

ブリジェッシュは、ネパール人たちに起きた変化に気づきました。以前は食料を巡ってインド人と争っていたのに、優しくなり、分け合うようになりました。ある安息日、1人のネパール人がブリジェッシュをテントの教会に誘いました。テントに入ると、9人のネパール人たちが彼を歓迎し、彼と彼の家族、そして彼の未来のために祈ってくれました。彼らと一緒にいると、とても心が安らぎました。聖書をもらったので、それを読み、祈るようになりました。

ネパール人の友人が、もしイエス様のみ名によって祈るなら、神様はその祈りに答えてくださると教えてくれました。そこでブリジェッシュも祈ってみようと思いました。「神様、私はすべての重荷と問題をイエス・キリストに委ねます。イエス様のみ名によってお祈りします。アーメン」と祈りました。

祈り終わって目を開けると、まるで空を飛んでいるかのような気持ちになりました。ブリジェッシュは大事にしていたお守りを首から外すと、海に投げ捨てました。イエス様に従うことに決めたのです。

ブリジェッシュは難民申請を取り下げ、インドに送還されニューデリー空港に到着しました。インドネシアを出てから2年半が過ぎていました。

現在彼は、グローバル・ミッションの開拓者として働くかたわら、スパイサー・アドベンチスト大学で牧師になるための勉強をしています。この2年間に、4人の人が彼との聖書研究を通してイエス様へと導かれました。そしてさらに多くの人々がバプテスマに向けての準備をしています。彼の両親は、彼がヤップ島にいる間に何とか借金

を返し終え、今は聖書研究をしています。

ブリジェッシュは9人のネパール人とは今も連絡を取りあっています。全員が今も忠実なアドベンチストとして、ネパールに住んでいます。ブリジェッシュ以外にインド人が1人アドベンチストになって、インドで洋服関係のビジネスを営んでいます。その他の人とは音信が途絶えてしまいました。「私は周りの人に主のことを伝えたいのです。神様は私が何も持っていないときに助けてくださいました」

今期の13回献金の一部は、ヴァーラーナシー・セブンスデー・アドベンチスト学校に新しい宿舎を作るために使われます。その宿舎には教室と寮があり、ブリジェッシュたちはそこで福音伝道者たちの訓練をすることができます。皆様の惜しみない献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

- YouTube でブリジェッシュを見ることができます。(bit.ly/Brijesh-Kumar)
- Facebook (bit.ly/fb-mq) で写真をダウンロードしてください。

#### 豆知識

- 2018年、干ばつに苦しんでいたヴァーラーナシーの人々は、ヒンズー教の雨の神、インドラを喜ばせるために2つのプラスチック製のカエルを結婚させました。ヒンズー教の神話によると、野生のカエルが人間と同じ儀式にのっとなって結婚したら雨が降ることになっています。

## 6. 変わってしまったおじいちゃん

インド



カジェル・カノジャ 14歳

カジェルのおじいちゃんは優しい人で、よくお話をしてくれました。2つ違いの弟のニシャンとも、床に座って一緒に遊んでくれました。

けれどもカジェルが5歳の時、市場の帰り道に滑って転んだせいで、おじいちゃんはすっかり変わってしまいました。自分で起き上がることはできましたが、以前のような優しさは無くなりました。ニシャンと一緒に遊ぼうとすると叫び声を上げ、カジェルがお話を聞かせてもらおうとすると石を投げてきました。家の周りを狂ったように走り回ったりもしました。屋根の上に登って飛び降りることが何度もありました。そして昼も夜も叫んでいました。みんながおじいちゃんに近づくのを怖がっていました。おばあちゃんですえもです。カジェルはおじいちゃんが近づいてくると物陰に隠れました。

お父さんとお母さん、おばあちゃんは、おじいちゃんをあちこちの大きな病院に連れて行きました。悪い霊を追い出すというまじない師のところにも行きました。薬も飲ませました。でもどれも効き目はありませんでした。

カジェルは悲しく、また不安でした。またおじいちゃんにお話を聞きたいと思いました。両親もおばあちゃんもやはり悲しく、心配しました。みんな、おじいちゃんが家の神棚から、石でできた神を取り出して、投げつけてくるのが嫌でした。

「どうして私たちの神は、おじいちゃんがそれを投げつけるのを止められないんだろう」お父さんが言いました。

「神に頼らないで、自分たちでどうにかしないと」おばあちゃんが言いました。

家族は、石の神への信仰を失いました。けれどもおじいちゃんの病気を治す方法を探し続けて、ついに、村から大都会ワラーナシーに引っ越して、探すことにしました。家族で小さな部屋に引っ越したとき、カジェルは嬉しい気持ちになりました。そして、おじいちゃんが良くなって、またお話を聞かせてくれたらいいなと思いました。

お父さんとお母さんは小さなクリーニング店を始めました。預かった服を洗ってアイロンをかけます。そして、おじいちゃんを様々なお医者さんのところに連れて行きました。

ある日曜日、お父さんとお母さんは教会に行くことにしました。牧師先生におじいちゃんのために祈ってもらおうと良いと、店に来るお客さんに熱心に勧められたからです。お父さんとお母さんはクリスチャンではありませんでしたが、おじいちゃんを助けてもらえるのなら喜んで新しい神様にお祈りしようという気持ちでいました。お母さんは、カジェルと弟は教会に行くには小さすぎるので、家でおじいちゃんおばあちゃんと待っているようにと言いました。

教会から帰ってきたお母さんは、おばあちゃんに、牧師先生がおじいちゃんと家族のためにお祈りしてくれたこと、もっとお祈りしてもらうために来週の日曜日もお父さんと教会に行こうと思っていることを伝えました。

そこで問題が起きました。イエス様におじいちゃんを治してもらおうと思っていることを知ったアパートの大家さんが怒って、家族は部屋から追い出されてしまったのです。

「あんたたちが教会に行つてイエスを信じるのは自由だ。でもそういう人を部屋に置いておくわけにはいかないよ」と大家さんは言いました。

ほかに安い部屋が見つからなかったので、家族はまた村に戻りました。お父さんもお母さんもガッカリしました。イエス様のことが大好きになったのに、村には教会が無かったからです。家族みんなで毎日イエス様を礼拝しました。お父さんは「主よ、もしあなたが愛の神であるなら、どこに行ったらよいのか示してください。」と祈りました。

次の土曜日の朝、お母さんは風に乗って気持ちのよい音楽が聞こえてくることに気づきました。庭に出ると、通りの向いの家の中で歌っている人たちが見えました。

「あそこで皆さん何をしているのですか」と近所の人に聞くと、その人は「礼拝をしているんですよ」と教えてくれました。

「今まであそこで礼拝なんてしてませんでしたよね。それに、なぜ日曜日でもないのに礼拝してるんですか」お母さんは尋ねましたが、近所の人にもわかりませんでした。

そのとき、近所に住んでいるジラさんが、2人の会話を聞いて話しかけてきました。

「一緒に行きませんか。私も行くところなんですよ」ジラさんはセブンスデー・アドベンチストでした。

ジラさんはお母さんをアドベンチストの牧師先生に紹介しました。牧師先生はその「家の教会」の礼拝にお母さんを誘いました。お母さんは参加しましたが、なぜ日曜日ではなく土曜日に礼拝をしているのか不思議に思いました。礼拝の最後に、お母さんは牧師先生に質問しました。

「どうして皆さんは土曜日に礼拝するのですか。クリスチャンはみんな日曜日に礼拝しているのに、なぜですか」

「聖書の中からお答えしましょう」と牧師先生は言いました。

その週にお父さん、お母さん、おばあさんは聖書研究を始めました。まず学んだのは天地創造で、神様が第7日を聖別したことを知りました。3人とも心をイエス様に捧げました。

残念なことに、おじいちゃんの病気は回復しませんでした。おじいちゃんは、家族が聖書研究をしていた間に亡くなりました。

カジェルがおじいちゃんにお話をしてもらうことはもうありませんが、おじいちゃんから聞いたことのない、素晴らしいお話が書かれている聖書と出会ってとても幸せです。今彼女は14歳で、12歳の弟と共に、ワラーナシーにあるセブンスデー・アドベンチストの寮制の学校で聖書を学んでいます。今期の13回献金の一部はこの学校の寄宿舎の拡張工事のために使われます。

「私は賛美と、聖書を学ぶこと、学校で学ぶことが好きです。寄宿舎が大きくなったら今よりも多くの子どもたちが賛美したり聖書研究をして、祈ることができます」

ヴァラーナシーにあるカジェルの学校や、その他のインド周辺プロジェクトに対する皆様の惜しみない献金に感謝します。人生を変える力のあるイエス様のお話を聞く機会が、インドの大切な友人たちに与えられていることを感謝しています。

#### 〈お話のヒント〉

- お話を読む人は、暗記とまではいかなくても何度か読み込んでおきましょう。
- お母さんの名前はカンチャン・カノジヤ(36歳)、お父さんの名前はプラモッド・クマール(40歳)です。
- お母さんは教会会計として奉仕していて、教会プログラムでは子どもたちの先生をしています。この3年間のお母さんの働きにより、8人がバプテスマを受けました。
- YouTube でカジェルを見ることができます。  
[bit.ly/Kajal-Kannojiya](https://bit.ly/Kajal-Kannojiya)
- Facebook ([bit.ly/fb-mq](https://bit.ly/fb-mq)) で写真をダウンロードしてください。